

自叙傳材料

大正七年三月十五日
起著者同亮
録了

三

特別
14
1919
753



材料の三

趣味方面

一 自分のもとの歴史は趣味の歴史であることも
 三つ、自分の趣味を造る方面である、何
 とも少しく親しむべきの趣味を感ず
 る物に、或る人々此方面に天才うちると
 するが、それと趣味を解する人の解釈
 である物に、思ふに今体物と物と連つて
 七 趣味を造るか、七連の四、一つの物に
 味を解する人の物も趣味を感し得
 く、道徳心ある、例へば、趣味うあ

六骨董も執味を感ずること左まむ困難
ひまの積るゝもの、但に執味性うあつてこ
無いらん因つてある

一 自分自身の執味性か人をし中をむるも七
ゆゑ、深し家庭に遊つてうも力あるお
連るゝ、自分の考で、先考、執味の
へいあつたか、思の、持柔も柔人
正式、教育を受けん、以書を能く
如、古語、飲り能、うあつた
此、思ひ、玩ん、骨董、
味とあつて、軍者

執味らあつた、執、後、酒、
後、ま、地、教、の、酒、
の、地、酒、酒、
え、酒、酒、酒、
い、酒、酒、酒、
之、酒、酒、酒、
ハ、酒、酒、酒、
了、酒、酒、酒、
回、酒、酒、酒、
一、酒、酒、酒、
数、酒、酒、酒、

自分：教育した子供のため、画家や印人
らとく言ふ高しと告つたうして其の感心
叔父のゆゑと印を彫る人七出来画と心
人七出来、いんふこと七自分の致味と美事
に或くつ動をあらした七初め也

一 自分：中年以後致味は純じつうく人の
感心と多ければにお事する例くは文氣の
ハ保め道徳を以て致味を居る例は
うと固き致味をまじり又次り其徳を
受けたと思ふべきを、いんむを中年以
後のまじりありて、誰れもまじり
くつう：致味を感する年をいふ

か自分：誰れの指道すを受けたりと
誰れも直つてゐるうと、七年の代り
まじり味の中、時中致味は池致味の
いくつう骨董致味、而して最大
キ酒の致味を感し有してその
ゆゑに家庭に、血統に、来るべき
七の心あり

一 早世した自分の長男のうと、一の致味
と多し誰の致のむと、其方而の
語ら深しうと、次男のうと、其方而の
外を多し終て其道に入つて今も其人
を感するうと、自分も其うと

教味さうき言楽教味は國境に無つて
之をさよふ位に、おまゝにコシナツの生か
るも家の教味の運統、さう来たる心
あううて、

今別々に自分の教味の歴史を叙す
あり先づ國者教味さうき如く、さう
くの教味さ、國者教味さうき海に出
し思ふさう

○國者教味

自分の家より試みはさうき(さうき)有教の
者が是つたためさうきの國者と花し(國
)と二居格の花者家さうきの、清者の心は

市街の家さうきと今歴史がさうきさうき、さうき
持て難しと、さうきの花者家さうき無
けは六十三行はさうきをコシナツの無つた
頃さうき、自分の心さうきさうきの
時、二三日、清りさうき、さうきの本は一杯
さうきさうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうきさうき
全部さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうきさうき
全集や其他の書を選んでさうきさうき
さうき、さうきさうきさうきさうきさうき

八大家活字本の進献本(日本国最良の紙
で特製のもの)もありながら、其供心にこそしう
よの本に無い校入、思つた位、立派な本で
あつた。

一 自か、讀む方々の、随筆類を和漢下のお
ろく、言にまゝ方面に、造るまゝ元の如くして、
よのしと、こぼれ、しおくした、が、何に、え
の別、ろく、古、抄、を、ろく、言、を、集、め、る、癖
う、あ、つ、た、終、り、を、(二十四、五、才、こ、ま、) 尾
書、家、は、ろく、と、見、比、し、し、を、思、ひ、ま、さ、し、ん
の、力、を、搦、ら、ま、志、ま、き、り、に、買、込、ま、れ、こ、も
あ、つ、た、保、し、こ、も、は、経、常、的、を、進、め、る

こ、と、い、つ、出、来、る、ろ、く、と、あ、つ、た、六、千、冊、位、と
集、め、て、見、比、し、今、も、あ、つ、た、危、き、目、録
う、幾、つ、て、ろ、く、と、あ、つ、た、大、抵、の、こ、も、ま
あ、つ、た、見、比、し、こ、の、危、集、り、を、十、冊、位、
七、冊、位、と、見、比、し、あ、つ、た、ろ、く、と、あ、つ、た、
ま、ろ、く、と、見、比、し、家、こ、ろ、ま、ろ、く、と、あ、つ、た、
目、録、あ、つ、た、ろ、く、と、見、比、し、危、き、目、録、
あ、つ、た、目、録、と、見、比、し、あ、つ、た、時、は、あ、つ、た、
ろ、く、と、見、比、し、あ、つ、た、危、集、り、と、見、比、し、
あ、つ、た、

一 此、頃、と、ま、ま、(回、考、) 増、修、の、あ、つ、た、こ、も、
く、あ、つ、た、敢、て、改、正、を、な、さ、れ、た、こ、も、あ、つ、た、

七無の以、謂りて千切め代ともさるるを
あり以、此者物之後全部に事あるま
投に極し以、かつも自分かのは者印の極
しとある本もふらう無の、皆る自分さ
極し以、固者んある、何れ極しとこと云
ふと固者致味をさつ以、みむはさう
自分さ極事をもさつて辞まらぬ
号我さうの傍りなきの、千五るの因不
とあつた、さうを傍りさうさうさうさ
花もさうを完て以、むあつた
其後追に固者致味の向上してさ
と前集の以、極らうさうの、あつたさう

無くさうと感さるる愛情の念々
毛頭無の、念之存もおはぬ、解に或
意の方、**無**をも甚集克と合つる
こときい思ひさうと、其はさう感
た、又固者をさうさうさうさうさうさ
致味の無のとも思つた、
自分固者、無涙、傍りら随つて古致致
味や致者致味や、言奉致味さうと感さ
るん、以、以、一、早極由さうさう、以、築
固者致さう出来さう致者さうさうと感
し固者を以、以、結果と、固者致者
さうさうさう各所の極觀本を觀覽

しに結果を固方刊行を起して刊行
すべき固方を道擇しに結果に因る
ことあり

一 早稲田なるの固方彼長とるるも其の
位地に在つたことと自分の田畠を記念す
べき事とあり、自分の地位に在りて趣
味の別をとり、自分と固方と事
程々の経歴のありか中杞り即ち此
の固方彼とあり、自分の平生の趣味の
歴史、最近関係の歴史といふと此の固
方彼とあり

一 自分、新居の大志、得る、為後創設

一 此のころの出来事、身ころうに於て
早稲田の固方彼と新築をえ、此の
建築の途を途中兼に新築をせしむ
此ころの出来事、身ころうに於て
めいめい、君は為後創設とるるに
いづか、新居、新居、新居、新居
のあり、その出来事、身ころうに於て
来者物ぬきとあり、身ころうに於て
ト、自分、取つて、新居、新居、新居
目い無、この出来事、身ころうに於て
う、金、金、金、金、金、金、金、金
且つ自分の趣味を満足せしむるは

其の多きもの如きものと比較的多くあり
且つ傍りも多しありと云ふ之れも採集し
力を入るべし

北沢和洋方の書の中は底と云ふは池之端
の錦織の因の家を買つて底を造つてその
に珠琅洞といふ名を置かれありといふ
は毎り仕立の秋入出づりて晝飯七地
底の仕立をいふと云ふ換ふことと終
日つけいひつれば位のいふはありて
又ありといふ夥しといふ國方を造りしに
いふは論、傍りも多しありと云ふは採
集えしものありといふ

吉田重藏や狩野棟相の道と辨に
ちありて一旦の荒ぶるはさく清人
楊惺吾のうらむるも其の成るに因
ちを造り且つまゝの古版を支那
・持つて日録つたことと漸々
日本の版者と教へ醒し自分の國
者造りをするは、後より古版を採りて
五山版のむすむ既立冊本なる因
ちをいふにんてその時、古版の
鑑取のやまのうらむるは、
に、珠琅洞のうらむるは楊惺吾の
國者なる集りて造つたものあり

ふ、直交向にち枯らうとらうと長つん
北家のせあうと自分のおに回書致
味家のいろうくやつて来日以上の毎
いとうと、なん等と無言とらう
回書に就て討論しなこともあらし
自分の回書に就ての録談七ツン
く進んて来れ

一
自分の早稲田の回書致長、うらうり
と日本文庫協会のところからつて回
書致長うのゆい争して回書のいふこと
さ行くおんをさうとせうういふあめい
ちし振るううれせのいひ、自分か

うまのいん上長と存けんといふと不
振のすしに七つ豆けがし自分ハ早稲
田の北は早稲と自分のいひ、経も才
とまら振出にゆかりしあめ西
も回書のいふあうれのこと統一し
終つてうまの回書致をいひ念し
いふをいふとまらう旅徳七いひ
刊し今ののいひときき隆盛をいひ
る端をいひしに、いひも致味上らう
出れ一の成印とまらあてせうらのいひ
う

一
北の回書致協会(文庫協会)を

改称一以のち自分の、名長め代の、南
葵文庫、改称、其術と唱へし、自
位地を、稱して、事、以、こと、も、あつた
の、お、は、な、ま、自、分、と、有、見、ら、る、圖、方、を
多く、削、り、た、校、入、り、を、得、た、圖、方、
寮、内、各、文、字、其、他、帝、大、帝、圖
の、大、圖、方、銀、の、論、桑、都、の、大、利
の、圖、方、も、も、進、て、関、説、し、る、こ、と
の、出、来、圖、方、改、味、い、る、ま、深、く、ま
鑑、察、と、念、を、進、む、ま、
自分、名長、と、同、者、改、味、い、る、長、と、同、者、
其、の、時、令、に、**一**、本、圖、方、を、刊、行、す、る、こ、と

を、刊、行、し、た、ま、あ、つ、た、大、隈、侯、に、鑑、察、を
頼、み、以、つ、て、その、意、を、進、む、自、分、の、理、ゆ、え
る、ん、と、い、ふ、献、立、を、お、つ、て、其、の、ま、ま、の、あ
る、ま、ま、を、い、は、る、清、見、の、ま、ま、の、大、隈、
と、い、ふ、者、物、を、い、は、る、ん、に、関、係、の、あ、つ、た
な、ま、ま、定、成、に、先、を、講、と、す、る、自、分、の、交
渉、の、あ、つ、た、自、分、の、圖、方、の、改、味、い、る
一、歩、を、進、め、し、**一**、未、刊、の、圖、方、を、多く、
刊、行、す、る、の、七、部、も、い、は、る、と、い、ふ、と、い、ふ、
費、成、し、た、大、隈、侯、を、鑑、察、し、る、年、の、侯、士
と、い、ふ、長、に、推、し、し、ま、あ、つ、た、自、分、の、理、ゆ、え
と、い、う、て、其、の、名、を、如、女、に、**一**、い、は、る、い、は、る

く刊行をなさぬのけを拒む出版
者の元祖で四方刊行者の名を重
重陸士の命令し以所である
此等ハ二劫也三期也連続して場
或信する未刊の圖考を以て回行し
が最初よりよりく隆盛で今更
つたものも多しうた、此程の命令は
いさぐく無つたため、初めは危
怖又彼の大橋もも古書人の方物
言ハ印つて信用あるとまを感
し以位心あつた、ゆるるは元月
一に今更に世の徳の行為(今更)

関係の無つたことだが、うを覺して
今と絡ませるを得ることなる、自
分獨りである、何事も、いさぐ
つた、今更とまを感する、自
かたに、既味こそ、出版に
とまを感する、無つた、内心
つた、今更とまを感する、自
業の、かたに、今更とまを感する、
自、関係と絡つた、今更とまを感する、
自、関係と絡つた、今更とまを感する、
自、関係と絡つた、今更とまを感する、
自、関係と絡つた、今更とまを感する、

34 支那の書づく

一 此の書は、四書五經の未刊の書物殊
に大部のものとして刊行してこの書は、
自今より日本の書物を殊に記帳類
を多くし多く知る機会を得る事
は殊に自今より刊行ししことを得た
に出版上活字の能力のあるものと
此の書のお陰を蒙る、今より多く
の書物を刊行し、後より見知りしつ
け自らも大隈侯七を刊行せしむる

大に角を裁上此の書は、
退陣の出来は、之は経字の初陣
として成りあつた

一 刊行上の注意をせよ、
二 方面に出版せること
三 起つた一は早稲田大学の出版
部一は大本本文の協会である
その際の出版部を初めに講義
の文を出してその書を、
翻写者を刊行する、
うきも、新文の所、
今の日、幹とうとうして、

理するところ、さうして、自費から衝く
つて、一向西を展洲したのを
其が蒙向出版を計畫し、通保
の圖書を志き、つる出したこと、
特記を要する、例の洋務圖書
解やる通保三十一史や通保日
本全史を志し、出したのを、
隆慶堂(通保)動じ、この大い、成切
し、譯者も出したところ、
この収入を起つる、
隆慶堂(通保)の通保、
而して、自費から、
十二

三三

一
文的協力を、隆文館と云ふ者、
の大隈伯を合さ、
刊行の規約
と換取して、
入の翻譯書の刊行を考へ、
ある、
あつた、
まう、
起つ、
及は、
この、

引取し、自分の立場を固く、勸め
て其の衝に當ることを、さう考へる努力
し、それが、隆又と関係をも全
然つゝ、或は絶望するおそれ、これ
自分の関係の創出の時、主として
これを改、十年に成るべくして、其の
批評者の多くを、さう考へて、出
が、十年間の刊行数を決して、十
ろうと、固く、自分の主義を、
守るべく、奮然しい著述を、何人も
及ぶもの、と、すゝめ、評して、出
て、おぼろげの困難さ、を、二年

有る前に、その年間の分、費を
一、出さず、推察する、と、さう、考へ、
資金を集めて、見よう、最初、
二人を、おぼろげ、と、考へ、
今、その、後、教へ、も、な、し、て、さ、う、

一
自分の前、自分の、関係、味、や、
早稲田の、関係、中心、と、さ、う、
考へ、今、考へ、け、た、関係、協、会、を、
七、刊、行、を、さ、う、考へ、の、協、会、を、
考へ、早稲田の、関係、味、を、
考へ、自分の、立場、を、利、用、し、て、
今、考へ、し、て、相、あ、り、の、こ、と、を、

キツけたらあてあつたら同者終に成ふか
何れも七段の購入費らうか弱目じり
ていふはあつてくると金うらまふは
あつたか角注しと思ふはあつた
元より道しに命をきかすはあつた
毎に買ふときを終り非と執つた
其の体なきにじあといふ可き
人より附とせし物種をえりたこ
ともあつた、今早稲田の大切の
あつたを馬買つたのあつたを
庭買つたのあつたのあつたを
あつたのあつたのあつたのあつた

のあつたのあつたのあつたのあつた
とせし買入のあつたのあつたのあつた
同者終に成ふか弱目じり
ていふはあつてくると金うらまふは
あつたか角注しと思ふはあつた
元より道しに命をきかすはあつた
毎に買ふときを終り非と執つた
其の体なきにじあといふ可き
人より附とせし物種をえりたこ
ともあつた、今早稲田の大切の
あつたを馬買つたのあつたを
庭買つたのあつたのあつたを
あつたのあつたのあつたのあつた

伯の字附をいふとあるは、
 中伯の腹の大きさは、
 自分の腹も、
 仇い自分の腹も、
 果腹をも、
 八丈山伯と、
 一は女の結果、
 自分の腹も、
 一は又、
 自分ハ、
 と考へて、

とも各方面に、
 五つを、
 三つと、
 りあつて、
 無
 一
 自分自身ハ、
 腹い、
 無
 る、
 ぬ、
 ことを、

たのしみやあつた、好由も是の世
その氣をふる所、
後の錦織二番校者、
物を念ひて、四千ある田を授け
つこも。

大典の紀念、
研究をせし、
自ら、
文終の、
結果、
しが、
こゝつて、

起り、
紀念、
ぬ、
此の、
大団、
難、
ひ。

一
自分の、
こと、
は、
ろう、

さう七地車家にうづつ比が、まをきぶじ
つまじぬこと比、え来地車家の断片の
て散漫のうらむある、自分、往々のあ
方面に散味を鼓吹したのに地車家の
興つて力あつても切ぬぬが、自今に大書
をわす志を起さしめぬのも、此の散漫
たる断片の地車家のうらむをうして
比に相違ある、自今に地車家に比し
比よりの中心に漢とよまはぬ七のうら
いぶ、其のうらむは別冊に録してあ
る通りである

一 自今に五六千冊の古籍を集めて終つて

校に納めて以来、比のうらむ多くの花を
有する地車家を棄て比併し、圖書收
味、益々昂進し鑑識し金に進む
来比の比、收本言士のあつて、稀観
の圖書を購めし玩賞すること
さう比、併し買力う無い為り、さ
く購め、ことう出来ず購つてもさ
持ち切ぬが、終つて、手離し、比も
こむつた、行きさうを七一時、圖書大
いふべき者を所おして、さう比、乃ち
白鳳迄る、一葉田の價のあつた、
石川年迄の大紋荒る、七書う書の

七のてある、此等の経典と大改の友人の経
巻紙味をとりしてそのて紙しつゝから皆
る懐つて仕舞拜つた、聊う千元二幾つに
宋元版や名家の自筆本をいふ山あり
いくつもあるいふあるが、先次幾つ
無くまうつて身後の計をまうる資に
充てた、此の教紙のめしむるの書務
む七五十四むいふまうつた

自分が名家の書簡を蒐集し誦誦を
修する程の大收存家とまうたのも書面
紙味をいふいふも同者紙味をいふこ
進んじよあひある、又印に紙味を感

しまくの印を集ちることなうつたのも
同者紙味をいふ進入つたの紙乃ち印書
を多く集ちてそのいふ實歎に紙しく
まうつた執心いふも、印文の印書と
共に今版をいふ紙にして長ふ、六陶器
紙の紙味を感して深も同者紙味
いふ紙とまうつた、其既本をいふ
思つて長る頃其既陶器、手を出し
ぬめ

尚ほ同者にして自分か、関の係しにこ
を奉ぐんか所古田博士の不朽の大著
大日本地名辞典と出す、就この大著

ハ自分より其つたのがある。當時不知言の千元
ひあつたに、自ら揃ふが幾月うは次々
とも出して助けに、三者をのる科辭典も
三者をが破産して踏踏した頃復元
と繼續に相當の努力をこし、修史の
の史料を其儘に埋没して置くの情し
あふきである。公刊するしとの意見
を、佐治行雄の又都大匠の時考
面を以つて説き、是れを實行するに
至つた。三上を、勅撰の自分からある
ことらむと、あつた。その旨を、
勅撰より起つて、是れを、あつた。のち

都立の博士に書くのせしことを、今も記
懐して居る。又大隈侯の院理大臣時
代に内閣文庫とを公開するとして
此時も、その面を、あつた。進言した。今
宮内省の構内に、文庫を、置かして
あつた。の門を、つけ、あつた。が自由
への出入り出来あつた。と、今も公
開と、その行の、あつた。が、あつた。の
進言の、あつた。の、あつた。の、あつた。
一、あつた。の、あつた。の、あつた。の、あつた。
あつた。の、あつた。の、あつた。の、あつた。
あつた。の、あつた。の、あつた。の、あつた。

一
友人阪口五友年が三十五年の心血を凝き撰入
詩流を著しし由り出政の所念に道進
あはれん：此を及ぶ限り助け此郷
國の新書：著者の苦心を紙外でんと
欲して二十の川連載せしむ紙外文
を著しし由り載せんとすものも言ふ回
考致味のお動におきぬ、九州堺
の南宗寺が隆盛の資を導くと決
し其寺：古政の跡のありに氣
うき、をんを別行して言附を募る
材料に供ししは自今に興味を感
し、縁あり寺の力の同人を促して

此の古政の正歴や書手をも所次を叙
し、初進傳：異くして纂集を助けたる
十餘計のお世話も又此の國考致味の
を動じ此等のつまぬ話しと吃たる者
深の例として奉けるのである
一
自分の一生をどうあるべきと定むる印創
：因縁の深、版や活字ハ自今この世流
：大関保らある書生の代にさす
記あるよりして元々、終に老のころ、
内外政事重す時とさふお新書を起して
亡友の相念とれ、古い此の年、初め
て、其の由新書や新刊新書のすること

郷土の歴史の主筆とをきつて、
ゆくり漢文を著し、
拙文を流字に組むこと十数年、
つとて、新書も四巻あること、
更に後より、
此も言へる、
と生涯の歴史、
副刊社、
株主とも、
今、
り版の因縁と

書畫の味

一 自分い書畫の味も、
自分い書畫の味も、
ハ自分い試みたこと、
ハ、
為す、
畫、
ま、
も、

者ハ勿論趣味を感じず。自分ハ趣味
味々重々文人凡々あるのハ、實を云ハ
バ、書畫七回書趣味、この途ハ遠入
つたのもある。この書物ハ、女子家の世ハ
方々自分の趣味、このあるのハ、文人の院
歴や、その書の傳り、とよき知つて見
ること、其人の書や、道、のあつた、この成
り、その、この途入つたのもある、この文
二趣味がある、評比

者、扱ひ、そのも、自分の、その、何ん、
自分の、その、その、その、その、その、
下と論せぬ、装飾、と、その、その、
この、一向、その、その、その、その、
感、その、その、その、その、その、
ある、その、その、その、その、その、
味、その、その、その、その、その、
分、その、その、その、その、その、
ハ、無、その、その、その、その、その、
の、その、その、その、その、その、
を、その、その、その、その、その、
大抵、その、その、その、その、その、

著款七無の類なるものを珠とするところあり
高の鑑談と進人の類題を要する自
分の常つて及故執味論を著して此等
の消息を細説したることあり、是れ
強述の才ありぬりぬりあり

一 自合が十数年、菟集に没頭して
のち名家の手簡ひき、これ七勿論
及故執味論を著して、固執執味論
とせしむる固執論の、初め此菟集
を思ひ立つた勤続、自合の次力、無
いころ多くの金を投じて名簡を購
ふことより出来ぬ、又五万の千円を投じて

一編や二編の名簡を蔵した所なき
て自分の執味を満足せざる者、
うぬ、千簡をい、價の安いものあり、
千円も投じれば大抵の者簡なり、
よてあつて一編の名簡を購ふことも趣
味あり、深いに執味あり、
のるけ惜み、
此菟集の勤続あり

一 扱て著つて見ると有り觸るに、
三文び千入、
り稀なるもの著る、
る者の遺りあり

入の終る一巻百回を投す抄のこ
とら起す一巻百回を投す抄のこ
抄の起す一巻百回を投す抄のこ
十巻も終る或作も終る(入也)
て無いことを言つた

一
言の年簡のせむ集りて自分かお
大望を抱いた古来昔簡を集める
多くはこれの故にあつて歸し
終るといふ人といふ画家といふ
門の専らあるが自分かあつた方
面珠に在るに過して相南の人の
簡を著し過すに集めて見ると志

一
此、殊に隠れ人、乃ち昔あつた
名の知らぬ人、筆硯、縁の遠い
家といふ手紙を是の如しといふ
比、世流の年簡をいふ残るぬ
だが、せん、終しといふ面倒
者しと

一
年簡のときばうくしとマウリと一
枚く集めて積りて幾千回とせよ
るをいふをいふ世をいふ、一
枚ることいふ一生涯といふと
目的の半はる世をいふこと
然るに論法ること世は自分か

趣味の人のいくつあるか或る程が花
集めを續うが中途断念する人もあ
る。どうせ書簡をよむに集める人の趣味
はあつても境界通の優劣をいふ人多
い。池を折角に集めても主の要あるこ
とより起つて手離れぬものこととの
起る會場をいふも、その書簡の人の自
分の書簡を集めよう熱心であること
をいふやまき十卷二十卷をたつて未
だ割合を言するものが前後十数人あ
つた。勿論重複のあることはいふべからぬ
が、自分も大抵そのれを購ふに、優り

持主の言のうたれ取ると、一巻は高
七集めを苦心をえへて見ると苦心代を
拂ふうたれぬと思つた。さうである
が、比いつても此等の人のうたれぬ何人
七巻の忙しうの時こそ、さうであるとい
困つた

幾許の経年より、そのものを買つた者も割合
早く備へつたが、之れをいふと、さういふ
ぬきも投した、若由之う二十五年
つて集めても書簡合印を二十五巻を
おろすに、購ひ杉本風茶の集めて十巻を
つて三つ四巻を投し、休庵研湖の集

の比二十卷と云ふを刻言にあく大東
義殿の熊尾家古物此の二巻より
二巻目を授し、頼家系に頼家と稱
し、そのまゝ河原の寺に納し、
此の目を授し、房の家志三石の目
ら集書に二巻と云ふ者、
の白眉にえん、
三巻より、
をいを出し、
通より三巻の目、
現をみるく、
の庫より、

か愛りん比のてある

一 自分が集め初め比頃の世間、
い電きを、
あし原の、
比、
あ、
この、
古文書、
て巻、
あ、
と、

列を試み又當りて書大改の圖方
領之法ハルニ海列の爲め荒干を
傳し此ことをももたす、或向世可
知れ此爲のよきを評判うまら
つ比と目的、千箇の取味と價値
う認め、千箇の傳り、家、
昂り、
場を、
つ

一
自分、千箇取味を感して、友人、
各方面、
爲り、
終、

一
二十教書、
家、
出、
割、
斯、
と、
の、
と、
の、

一
斯く集を自分の空箱と雙魚を
と余し印も雙魚の中、文章
の二字を刻つて之れを収め、記
と、此印のあり、
の、

乙字のりもと色紙のちあふり印を捺
しと無んぞと云ふて来比こととあつた。
一 併し集あれ全部は三千一通位しり
無い、巻数は三百五十一外、指物形に
あつたをそのもの五十七あつたといふ
つ四巻巻位入るべきううに、その丈
に千紙道に於て古字五五所があつた
特ん籠まゝのものはその字をうま
おびりしむうと氣を入るは、古字
空所の名を傳し得る者と一笑し
名家方の（多）ねん（多）指物も多きを海峽
に朝と唱へたが、多きを金と

偽りを求めたりと云ふは、千紙の味
味に就て敢てかゝる所もあつた無つた
千紙に對する往々の説は多く千紙
施紙（多）其他に登載し、云ふは千紙
と云ふ題目に就ては自分から以上研究
して云ふ人多く無い類に思ふ、因にま
か此千紙施紙にたゞ自分の取味に授
しに施紙があつたか不幸なりと嘆
刊した

一 自分千紙間の蒐集に長き歳月を費
し、その七を新録に入らうと云ふ書
家如くも無い、傍らにはお山

麻喜新(四)ありてハ下河(五)長家(六)人
ハハ其(七)用(八)出(九)言(十)ハハ(十一)出(十二)達(十三)つ
う(十四)る(十五)鷹(十六)也(十七)列(十八)第(十九)中(二十)ハハ(二十一)朝(二十二)比(二十三)
を(二十四)遠(二十五)域(二十六)と(二十七)する

一 自分の收(入)に中(止)すること、関(関)要(要)さ
ず(八)堂(堂)傳(傳)し、品(品)物(物)を(九)見(見)す(十)し(十一)金(金)印(印)
萬(萬)由(由)に(十二)譲(譲)つ(十三)て(十四)流(流)し(十五)い(十六)ら(十七)る(十八)ま(十九)う(二十)し(二十一)て
を(二十二)言(二十三)は(二十四)れ(二十五)こ(二十六)も(二十七)あ(二十八)る(二十九)が、自(自)分(分)を(三十)養(養)
の(三十一)目(目)的(的)に(三十二)集(集)め(三十三)た(三十四)洋(洋)び(三十五)る(三十六)く、且(且)話(話)物
も(三十七)う(三十八)つ(三十九)て(四十)見(見)る(四十一)も(四十二)金(金)を(四十三)養(養)ふ(四十四)こと(四十五)も(四十六)而(而)
上(上)出(出)来(来)る(四十七)ま(四十八)う(四十九)つ(五十)て、也(也)千(千)難(難)可(可)氣(氣)ハ
無(無)つ(五十一)た(五十二)ら(五十三)ぬ(五十四)年(年)春(春)今(今)の(五十五)御(御)書(書)と(五十六)出(出)也

と(一)遊(二)び(三)よ(四)り(五)て(六)三(七)幕(八)目(九)の(十)た(十一)る(十二)ま(十三)と(十四)一(十五)
よ(十六)う(十七)い(十八)ん(十九)の(二十)た(二十一)ら(二十二)る(二十三)ま(二十四)と(二十五)三(二十六)
千(二十七)田(二十八)と(二十九)多(三十)人(三十一)由(三十二)由(三十三)奈(三十四)奈(三十五)免(三十六)氏(三十七)が(三十八)原(三十九)を(四十)免(四十一)
出(四十二)る(四十三)ま(四十四)して(四十五)ま(四十六)つ(四十七)ん(四十八)れ(四十九)其(五十)の(五十一)謝(五十二)禮(五十三)に(五十四)全(五十五)部
を(五十六)同(五十七)じ(五十八)に(五十九)贈(六十)つ(六十一)た(六十二)ら(六十三)ぬ(六十四)也(六十五)ハ(六十六)此(六十七)程(六十八)の(六十九)味(七十)
と(七十一)り(七十二)ぬ(七十三)人(七十四)の(七十五)ま(七十六)は(七十七)俗(七十八)人(七十九)の(八十)手(八十一)に(八十二)流(八十三)
す(八十四)ま(八十五)し(八十六)を(八十七)懐(八十八)と(八十九)思(九十)つ(九十一)た(九十二)ら(九十三)ぬ(九十四)也(九十五)ハ(九十六)
こ(九十七)と(九十八)り(九十九)し(一〇〇)た

一 自(自)分(分)の(一)才(二)画(三)味(四)を(五)上(六)来(七)の(八)こ(九)と(十)く(十一)又(十二)而(十三)
孰(孰)味(味)び(十四)あ(十五)ら(十六)ぶ(十七)お(十八)角(十九)鼻(二十)女(二十一)れ(二十二)者(二十三)何(二十四)や(二十五)る
巻(巻)む(二十六)ら(二十七)る(二十八)し(二十九)の(三十)程(三十一)ら(三十二)の(三十三)果(三十四)績(三十五)に(三十六)え(三十七)る(三十八)家(三十九)を
購(購)ぬ(四十)資(四十一)を(四十二)心(四十三)す(四十四)時(四十五)一(四十六)拵(四十七)ぬ(四十八)ぬ(四十九)の(五十)人

高橋樺堂は遠く北と一北に教して
又ハハ并ひ及好と果多具味七を
今ハ其心か幅と時と受入れし玩者
して是も幅類七家を贈ふゆゑ五
十幅受つたが、まふし三三三
ハ架中一にありてを

骨董趣味

印 華 硯

一 骨董とは古物の範圍ハ如何なる所
にあり、世の中にも骨董といふものハ如

何なる者も其味をわしとるゝを骨
董の内其あるの程類に混る其味を
よく考ふべきあり、自今を何れも
と前あるに属する方ハあり、自今改
味をとりて骨董の印類を教へる
るゝは、骨董の教者ハ其の可いなる
物に其方々捷徑ハあり、刀剣や其の
所屬各々骨董の内ハ属するものと
ハ自今をこれに歸せらるゝは、先年ハ
物に其方面に其味を看せしむれば、自
今ハ何れの一かこれに歸せらるゝは
其代時修養のことと、硯のことと

部類ハ大体既考ふに、互に、此等も
演習しく巨資を要するに心とあるか
自アハ元来クスレト、臨の方面のもの
故味を成しどき、まもも燦爛と
七の玉、飯の具味を覚へるうつた自
分の玩考ぶに、互いに、此等三四
の部類、この物と大抵持
玩考ふに、持考ふるに、一時と
いふく、海つて見れば、係し
終に、前考ふる故味に、物つた、自今と
考ふに、此等文人凡と考ふ、此等
に、此等文人と考ふ、此等

味文人故味のあり

一 自今ハ此方面に、此等おのふ、或る二三
の者、偏し、蒐集、改訂した、一時の
考念を、おのふ、集めて見れば、この形
の、おのふ、云々、この物つた、其
の故味の、此方面の、この、力を
入れて見れば、又同時に、意匠の異、ある、某
事、軸の物、此の異、ある、ある、
際、此等と、志して見れば、この、考念
と、此の、形、この、其の、考念、
何れ、此の、故味、この、考念、
此、今、この、考念、この、考念、

自分の集め始めは、このころから十年の
七前びあつたころ、三巻の集まり、僅ら
に三年かゝつてゐる幾十の巻種の書
を得たものと、おぼされたが、これをさうの
く、意味のあるもの、人に観せたいも
いろくのものもある。●七のころ一巻と
喫する集り、位であつた、これは此後集
まり、心を家の書物と云つて、時と関
係を初めとして、さういふ人もあつた
つた

ある、手前、次にハ、これ、自分の精力の注
ぐ、家である、自分の此の趣味を感する、
つた、さういふころ、このころ、おぼれた、印
時代、叔父、後、心を刻して、思つた、
ことも、遠い、因、あつた、先考が晩年
に、家、な、没、次、を、し、五、十、冊、の、自、家
の、書、文、を、遺、す、た、は、御、く、え、ん、と、な、つ、た
鼓、吹、也、助、け、を、考、へ、お、お、お、の、因、考
を、考、集、す、る、序、の、多、く、の、印、譜、也、を、
その、根、本、と、し、て、編、め、印、譜、の、一、時、集
名の、考、を、式、と、考、え、る、時、を、考、中
う、ま、き、つ、る、大、部、分、を、考、へ、た、る、の、

元々直接印を集める動機と云うに堪

一
自分の印執味を感じて書比る初とま
此中井敏所演打卷の石倉下中いこ
んと時々雖来し此中いも花といひ及
人といふ交つ比のころも余の印執味を故
吹すも此進つて力がある、亦又自分の友
人中に改は五峰、や高橋桂をいひ同
執味を有つて居る、五峰或る時に流
来う、そのとき君の方向執味を有るこ
ころが自分の道楽の印だといふ、自分
ハその時既に可うう印を有ると云ふ

流ひあつたらう、自分のまゝ、自分の
回廊もあると云ふ、所為の印を或
趣を出して示したる、五峰も之を
いふ、(印)に格をもふ、(系)
く及ぬといふ、自分の演村を友人
といひ、五峰の演介、信るのいふ
ころ、高橋は格をも、印刀を取り、自
己のいふ、五峰、いふも、数も、
此印の執味家である

一
自分の鶴魚石を數十顆得た、此
の醫三浦桐陰、其の秘刺の古書、
の刺、係る、消印二顆と五峰、と余

二一類つ、分其し以、五十年のそと終つ
九十年の印文び余のそと遠流の二を以
あつた、五峰ハ余の割奪と得たよあを
奪つて二類と併花えしして切余の
ふ所あつた、~~木~~木も其自分のまふそと余の
為り、新血石のまふ命を作つたまふ
此つこを惜まぬと云つた、同め、其のまふ
越向ふ所を注又とし、余のまふそと昔
一山あり略血の歌を世つたが、余七略
~~血~~血ハハの枝に七の流をあつて
歌し、新血と云ふを得ん、其のまふ
まふの血を補つて、其のまふそと云ふ

れまふ命の骨子とし、其のまふそと云ふ
のまふそと、五十年も衆流の公衆をうま
しと昔、計り没死し、枕南や海南に
証するまふ、一大まふ命う出来た、まふ
出来て七自分、まふそと云ふ、五峰
のまふそと、まふ命を渡す、授受の或を
まふけ、まふ、其のまふ、まふ、まふ
七おまふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ
が、果し、七命場と、星堤枕、枕の一、根
トし、印のまふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ
まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ
まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、まふ

花六念心の幅 **一** 西八月と高
 出の約の押さをも得今 **一** 花とん
 筆 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 二に定 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 の物 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 流 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
一 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 自分 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 ほか **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 元 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 味 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 年 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん

余の勢画石も同く **一** 花とん **一** 花とん
 比 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 え **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 比 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 併 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 今 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
一 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 自 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 一 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 方 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 と **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん
 回 **一** 花とん **一** 花とん **一** 花とん

思つて傍々物も買入らんと思つてはど
うしても譲らざるやうに、併し後々我を
かり償を乞ふけす。自分か進つた、自
分の之を得し思ふ、百人の遺印、其人
の位牌、同様のものもある、減多、印を
磨り潰さるべきもある、その儘保つた
もの、其を他金する、ことある、多々
ある、一程、珠味もある、こゝに、梅南の
印を得たのを、干始め、名家の遺印の
出さる、徳い、古きことを、贈物を、柴や、紙
す、こと、う、これ、えんも、志し、二年を、経、た
あ、南の結果、の、屋、お、よ、の、心、世、々、の、

私印を、見る、且、これ、梅、南、の、目、分、に、及
ぶ、の、い、ふ、の、と、思、ふ、今、た、な、ぬ、花、の
ま、なる、者、を、見る、け、て、え、ん、に

- 尾花 三沙
- 行 吧 梅 南
- 卷 七 廿 二 洲
- 細 井 東 皐
- 井 塔 行
- 淺 中 振 中
- 池 田 お 村
- 原 本 徹 石
- 市 井 芳 谷

此らばどういふとすまふと思つてこそ

一 自今ハ石印と集ちる傍ら長く銅印と集ちること又志して居るが古銅印とむむことハ容れ心まゐ、收蔵ハ七十顆の内直什と云ふべきよめと或許も無い、此印のこととさしあはぬ故味に属するものありしとて、換擇ししはあふさると一程の推説がある、常々此地方面に於て近年漢文して集められたり十顆程ありしと一考して得てこれ七架中ハ二五とある

一 自今ハ印の故味より一印人を心つて見ればと思ひ立ち西京に遊ぶに時々四山大臣のつ人とのみしとてふを授けし出し、京東に於て

其う同者故のさしあはれを執らざる傍印の修業とてそれとを印人ハ疑念下む此年殺した、又印の收蔵者ハ此の一時其所獲の印を授けし者うすしと力をしえんこととある、今架中ハ或十冊の此種の印譜があるのを自分のその以集めたよめむ

一 印の中心に此位して石の因縁より自今ハ石も又皆ぬらある、石の事と物を大小數十顆とてその名、又強固し海因、石を集ちることと志し、今收蔵の名ハ三十面むりあるが四五の枚し

誇るに足るべきものなき無心

一 他人一般の言葉に毛づくろい一時たぐひの毛の落し入り子母の毛をいじりて、
 数ある数を種し以て位點教は多の
 成金家が大金を投じて購ひよるといふ
 其機運こそ異なりしを望むるものなり
 人の趣味もさるるものなり、又かあるは
 自らさるるものもあらず、又かあるは骨董
 董や者画を玩ぶ、又一切高き氣味を
 ぬき、自らの趣味を投せぬものも、
 従金儲けを志す、巨利を博すとす、
 此れは居つてもさるるを購ひぬ、又か、
 十二

さるる目的なきもの、一匙を穿つてさるる
 人う交換をせしむるもの、自らの
 するを破るもの、従金自今に利ある
 ひと併し、新なる印書と土地を購ひぬ
 此れハ、さるるに止むを得無う、骨董
 の大半、とす、印一、ぬき、
 購ひぬ、とも出末す、又さるる、
 さるる、さるる、無心、

雅種趣味

一 自今ハ大抵のよあ、のしく、
 親しめ、

風味を今も得たことと云う、云うはるに
自らの趣味が秀るい、や、に、や、と、
後、晩、年、初、刊、の、用、に、右、道、樂、の、味、
を、ち、け、と、四、卷、論、を、ま、ん、じ、自、ら、を、直、に、
本、を、何、し、と、せ、二、頁、大、の、本、好、を、送、つ、に、
が、何、の、ゆ、え、に、何、の、地、に、あ、ら、い、に、ま、い、
流、流、を、し、大、抵、の、ま、い、の、味、
を、ま、い、と、せ、し、と、せ、と、せ、と、せ、
樂、を、別、格、と、せ、し、と、せ、と、せ、と、せ、
易、と、せ、と、せ、と、せ、と、せ、

一、自らの建築と、心、色、と、つ、か、
此、の、ま、い、の、味、と、あ、ら、い、と、せ、と、せ、
所、謂、の、

は、し、の、味、を、い、ふ、こ、と、も、解、し、と、せ、
些、細、な、事、も、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、
味、を、い、ふ、し、つ、も、市、中、の、出、る、こ、と、と、せ、
版、の、味、を、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、
家、の、味、を、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、
何、冊、も、あ、ら、い、の、論、を、い、ふ、と、せ、と、せ、
い、無、い、

一、但、は、自、ら、の、友、人、に、ま、い、の、大、家、と、せ、
ま、い、の、味、を、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、
行、の、味、を、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、
何、つ、つ、何、つ、つ、何、つ、つ、
ま、い、の、味、を、い、ふ、と、せ、と、せ、と、せ、

物にそののと強う執味を解せぬと云ふ心
はまゝ、執味を解しるゝ何れかゝる氣
に正しむゝ執を打ち得ぬ道・途に一世
のうまきとてしるゝ文藝を場合を設け
れば時自今もさう曰人にかへし道途を
助けて見ればこともあるが他の方面の段々
割と執味とて執を捨つこととある
ぬ道途の自今もさう執味
の方面もあるが、いつか居るゝ割に
七古書いやく首書、執を捨つことと執味
ある自今もさう執を捨つことと執味
の、端のそと洩れさす位である

一 自今に基ぬ謀謀のこゝまに賭つとて一切解
まぬ海といくゝ(百行)とて老るゝ氣の
無の長明の上海士人、**中**の口上
る様々うらうらと事をも減らす氣の
俳句の月人の方に流折してさうさ
七考うて見る氣のさうさ、**中**とて自
分の無の用ひある、さうさ
最後に海とてことこの出来ぬ執味と
酒がある、自今自今の欺欺さるゝ泥にんを
漏らしてさうさ、自今に**母**を
たす執力とちりてさうさ、**中**にん
自今に追隨してさうさ、**中**を離

ぬふのよきこゑびある。自分の性格之酒は
飽飽満傳してそまお希まい、ま、之
れを者々に於ては自叙傳又大切なる
「プリント」を漸ぐるやみらる。

一 二夜及うて終つる。①自分、**禁酒**
を勧めしちまへ、**酒**し、**子**ぬるのよ
き志願行、お希まのが、ま、うし、**自**分
②、**ま**あといふ、**自**分のよき**大**き**飲**
味である、**か**うして、**二十**年**前**自分、**大**
患に罹つた、**ま**因七、**こ**ゑ、**因**のよき、
今、**ま**きをそる、**の**よき**大**患**後**酒を、**ま**
い、**か**ら、**あ**らう、**大**患**後**、**十**年、**禁**酒

の考より、**酒**の**飲**味、**酒**の**代**つた、**飲**味
もの、**あ**らう、**大**患**前**と酒ら、**の**よき、**飲**味、
後、**の**よき、**飲**味、**を**、**ま**、**あ**らう、**の**よき、**飲**味、
位、**一**生、**の**よき、**長**く、**一**、**飲**味、
と、**あ**らう、**酒**の**あ**らう

一 自分、**酒**の**飲**味、**酒**の**代**つた、**飲**味
を、**あ**らう、**酒**の**あ**らう、**の**よき、**飲**味、
切、**の**よき、**自**分の**酒**を、**飲**味、**を**
あらう、**酒**の**あ**らう、**の**よき、**飲**味、
あらう、**酒**の**あ**らう、**の**よき、**飲**味、
、**の**よき、**酒**を、**飲**味、**を**
あらう、**酒**の**あ**らう、**の**よき、**飲**味、
あらう、**酒**の**あ**らう、**の**よき、**飲**味、

能のれと申すを、使しきりてその七
年、代珠に寄るといふお尋ねを
の代通と能してその代通に
ひの無い、喜多此等、及お尋ね
つれに、喜多此等、及お尋ね
ひある。

一 身命をうけるまふは、代通の代
能のれと申すを、使しきりてその七
年の代通に寄るといふお尋ねを
の代通と能してその代通に
ひの無い、喜多此等、及お尋ね
つれに、喜多此等、及お尋ね
ひある。

能のれと申すを、使しきりてその七
年の代通に寄るといふお尋ねを
の代通と能してその代通に
ひの無い、喜多此等、及お尋ね
つれに、喜多此等、及お尋ね
ひある。

一 身命をうけるまふは、代通の代
能のれと申すを、使しきりてその七
年の代通に寄るといふお尋ねを
の代通と能してその代通に
ひの無い、喜多此等、及お尋ね
つれに、喜多此等、及お尋ね
ひある。

ちうし身かまきく既らんとふとこい
又ふのむし無い身とまきく酒のぬ
まむ女の滋味を解しそると思ひ人
こしそと酒はまきく既らここの出来
あうしぬしが既らまきくぬとま
むいあいのまあのかつあるか自分とま
とまあつこまきく何を犠牲にして酒
を既らまきくゆまきくまきく酒と
ゆえまきくまきく酒とまきく酒と
とまきく酒とまきく酒とまきく酒と
とまきく酒とまきく酒と

一 此年開と得て酒法而則と古き時中

評と考しては乃ちその連載した、充分
自分の酒の性質や滋味を悉くする
する則とまきくは舞つたりは断後と
しは、箇中の滋味と聊うこんこあ
らひして長る積りひあ

一 考作しは、附記してまきく自分の抹茶
の形式と心得をまきくまきくは、併
し抹茶の滋味を解しそると思ひ人
日本に於ける、極味界の滋味は、抹茶に
在りといはれて長る、茶の滋味の
大なる力あることと思ひこまきく
既らあつたり、ちうし、滋味の茶、

海へてなすことと仔細に説き三十四
 及びその長と命をきつとけの二
 三登靴一とこともあること
 味の一端と先白一とある

